

日韓の架け橋になる。そのために。

平成28年度日本・韓国青年親善交流事業 参加青年 中尾 嘉宏

私が日韓青年親善交流のつどいを知ったのは昨年の募集期間が終わった直後くらいだった。昨年のその時期、私は日韓交流プログラムに参加したくてインターネットで日々検索していた。今年韓国派遣団の団員にも選ばれていたこともあり、韓国派遣中に出会う韓国青年たちと早く会って交流したいという思いで応募をした。応募をする時に私は「日韓の架け橋になる」という目標を掲げた。

まず、つどいに参加して一番良かったことは、日本・韓国の幅広い地域から集まった青年と出会えたことだ。初日は「仲良くなれるだろうか」「言葉はどのくらい通じるのだろうか」「日本男子が少ない」など様々な不安があった。しかし、実行委員の方々が用意してくれたアイスブレイクと一緒に食事をしていく中で自然と打ち解けていった。また、様々な地域・年代の青年が集まっただけあって、両国の青年から多くの刺激を得られた。例えば、私は語学力が乏しいが、日本語が上手な韓国青年が通訳をしてくれて語学面で助けられて、私ももっと韓国語を勉強しなければならないと実感した。また日本青年と会話をしていると韓国事情に非常に詳しい人がいて、私も日本のこと・韓国のことをもっと知らなければならぬと思った。両国の青年から良い刺激をもらった。

もう一つ良かったことがある。それはつどいの初日に

あった「文化交流の夕べ」というプログラムだ。このプログラムで韓国青年の出し物をたくさん見た。テコンドー、伝統的な話の劇、ダンス、歌など色々な出し物を披露してくれたが、どの出し物もクオリティが非常に高く、韓国文化を日本に伝えるために真剣に取り組んできたことが感じられた。それと同時に私たちが韓国派遣中に披露する出し物のクオリティや見せ方、練習への取り組み方などについても考えさせられた。今回のつどいで本年度韓国派遣団の日本青年は韓国青年から良い刺激をもらったと感じた。その結果、韓国派遣中の出し物も納得できるものを披露することができた。

最後に私が掲げた目標についてだ。つどいを終えた段階ではまだ「日韓の架け橋になる」という目標を達成できたかどうかは分からない。しかし、二泊三日という短い期間であったが、多くの日韓の青年と交流をして親睦を深めたことは確かである。一緒にゲームをしたこと、食事をしたこと、ディスカッションで真面目な話をしたこと、夜中まで語り合ったこと、どれも良い思い出である。つどいだけで終わる関係ではなく今後も付き合っていけるような関係を築いていきたいと思う。

そして、今回のつどいを運営してくれた実行委員の方々や日韓の参加青年との出会いに感謝をしたいと思います。ありがとうございました。



初めて会う韓国青年と自己紹介をする（筆者左）



二日目の夕食でバーベキューをする（筆者左から三番目）

「○○人」と考えないこと

一般参加青年 伊野 つづみ

「韓国人」とはどのような人たちなのでしょう。

私は今回つどいに参加するまで、韓国との関わりはほとんどありませんでした。韓国人の友人はほとんどおらず、韓国語も簡単な自己紹介ができる程度。韓国へのイメージといったら、おしゃれな人が多い、辛い料理、歴史認識の問題など漠然としたものしかありませんでした。隣の国、韓国をもっと知りたい。韓国の若者がどんな人で、どのようなことを考えているのか知りたい。そう思ったのが今回このつどいに参加したきっかけでした。

つどいの初日、ペア探しのプログラムがありました。私はなかなかペアを見つけることができませんでした。いろいろな人に声をかけながら途方に暮れていると、ふと後ろから韓国の女の子が声をかけてくれました。「ペア見つからないの？じゃあ、一緒に探そう！」彼女はにこっと笑ってそう言うと、まだ名前も知らない私と腕を組み、そのまま私のペア探しを手伝ってくれました。

その後も韓国青年の親切な心にたくさん触れました。輪に入れないでいるときにすぐに声をかけてくれる子。日本舞踊を披露した時に、真っ先に感想を言いに来てくれた子。韓国語の話せない私と仲良くなろうと、自由時間を削って私の似顔絵を描いてくれた子。日々青年たちとのきずなが深まることに喜びを感じました。韓国の人は温かくて優しいと感じました。

しかし、三日間の共同生活を続けるにつれ、韓国人も日本人も、皆同じなのではないかと考えるようにもなりました。もちろん、文化の違いは多くあります。言葉の壁もあるし、受けてきた教育も考え方も全く違うでしょう。しかし、その韓国の中にもいろいろな人がいます。初日の子のようにフレンドリーな子もいれば、シャイで黙っている子もいます。韓国人の中にもおしゃれでない人だってもちろんいます。日本が大好きな人も、当然そうでない人もいるかもしれません。だから、「韓国人の性格」「韓国人の考え方」などを特定することはできないと感じるようになったのです。「韓国人」とはどのような人たちなのでしょう。当初抱いていたこの問いに対し、今の私は「答えは無い」と言うと思います。

今、日本と韓国の関係はそれほど良いとは言えないでしょう。日本ではヘイトスピーチなども起きており、心が痛む限りです。しかし、その原因の一つは誤ったイメージに基づいて「韓国人はこうだ」と決めつけているからなのではないかと思っています。韓国の友人と多くつきあい、違いはあれど韓国人も日本人もいろいろな人がいて、国籍は関係なく結局同じ「人間」という仲間なんだ。このことを心から感じる事ができれば、差別や偏見もずっと少なくなるのではないかと感じました。

最後に、つどいに参加したことは私にとって一生物の思い出となりました。実行委員の方を始め、つどいの成功に携わったすべての方々へ感謝いたします。



一緒に日本舞踊を披露したメンバー（筆者中央）



ディスカッションの様子（筆者左）

つどいの輪

一般参加青年 田原 萌絵

今回の日韓青年親善交流のつどいに参加したいと思ったきっかけは大学のホームページに掲載されていたことで知り、応募したことです。私は以前から韓国の文化に興味があり、授業で韓国語の授業を履修していたので今回の機会ですさらに理解を深められると思い参加したいと思いました。楽しい気持ちが募る一方で、私は韓国語で話すことができないので当日までは不安な気持ちがありました。しかし、いざ交流会に参加してみると言語が通じない時は周りの方々からのサポートで通訳していただき、またジェスチャーなどでも会話することができたので感動しました。韓国青年の方々の中には日本語がすごく上手な方もいらっしゃったので私も見習ってこれからも勉強をしていきたいと思いました。

二日目のディスカッションでは、私は政治経済についてのテーマで話し合いました。難しいテーマでしたが、お互いの状況を改めて知ることによって新しい発見があり、討論が盛り上がったと思います。最初は難しく意見を出すことができませんでしたが、このような機会があったからこそ知ることができた話題だったので、これから交流

していく際でも政治経済の話題を考えていきたいと思いました。

夜に行われた文化交流では、それぞれの発表を通してたくさん吸収することができました。私はダンス発表のグループの一員として参加し、K-POPダンスを披露しました。韓国青年の方々から二日目にはアンコールをしてもらえてとても嬉しかったです。交流が一日目のときよりもさらに深まっていたことを実感しました。

最終日のフリータイムの際はあっという間に感じ、不安だった気持ちがうそのようでした。韓国青年の方々とは交流会の後に観光案内をすることができました。私はこの三日間を通して交流を深めたい気持ちを改めて感じることができ、今回だけではなくこれから先も交流の輪を深めていきたいと思いました。私は今回の機会は夏休みでとても充実した経験になったと思っています。今までよりも韓国についてさらに勉強に励もうと思いました。このような機会があったら是非参加していきたいです。

内閣府の方々、実行委員の皆様貴重な経験をありがとうございました。



グループで夕食を食べている様子(筆者左側から二番目)



うちわ作り発表の様子(筆者中央)

日韓の輪

実行委員長 清水 佳織

今回つどいの実行委員長をするにあたってなぜ自分が今まで日韓交流を続けてきたのかを考えた。振り返ってみると2014年に韓国派遣に行ってから事後活動を続けてきたが、一度も真剣に考えたことのないテーマだった。日韓交流を通して自分がどのような人物になりたいのか、なぜつどいをしなければならないのか、なぜ私が実行委員長でなければならないのか。なんとなくこんな人になりたい、自分はどうでありたい、というイメージがあった。また実行委員長としての責任を果たす自信もあった。しかしどれも明確ではなく、このままではつどいも曖昧に終わってしまうのではないかという危機感から実行委員が始動してからつどいが終わるまでの約三か月間、考え続けた。

すぐ簡単に答えが出ないのは今まで自分に向き合っていなかった証拠なのだろうか。とても難しかった。やっと出てきた答えにも「それはなぜ？」と自分自身に問いかけ、深く考えてみた。するといくつかのキーワードが浮かんできた。

「感謝・信頼・誠実」

これは私の人生理念でもあるのだが、つどいにおいても精通するものがあるということに気付いた。日韓派遣の先輩方への感謝の気持ちをつどい成功という形で示し

たい、今までの信頼関係をより深いものにするとともに新たな信頼関係を築いていきたいと考えていた。そのためには準備を誠実にやる必要があるとともに実行委員内での信頼関係も必要不可欠であった。

この私なりの理念に基づき、約三か月間、必死で準備を進めた。するとつどいが終わるとつどいを通して感謝を伝えようとしていた私が一番「ありがとう」の言葉をもたらしていることに気付いた。「ありがとう」が回り回っていくのが日韓派遣の良いところだな、と再確認した瞬間であった。

ある韓国青年が私にこんなことを聞いてきた。

「来月韓国派遣に来れないのになんでこんなに良くしてくれるの？」

私は迷いなく、「来月私の後輩が韓国派遣に行くから後輩たちをよろしくね」と答えた。こんな風にいつまでも日韓の輪がつながって行けばいいと思うとともに、今回のつどいとその日韓の輪の1ページになれた気がして嬉しかった。

最後に今回のつどいを準備するにあたってご協力してくださった皆様、特につどいの準備をするにあたって常に私の目標となり続けていた2014年度つどい実行委員の皆様と陰で私を支え続けてくれた韓国派遣同期の実行委員メンバーに心から感謝している。



実行委員の自己紹介をする（筆者左端）



開会式で実行委員長挨拶を述べる

参加者の声



たくさんの韓国青年と知り合い、つながりを広げられた。これからも付き合える人々と知り合うことができ、楽しいだけではなく、ディスカッションなど、お互いの国についてより理解を深められたことが良かった。

日本青年

様々なプログラムを通して交流をしたので、あっという間というよりも、むしろ三日間とは思えないほど内容が濃かった。

日本青年

社会人になってからはなかなか経験できないことを経験することができた。新しい出会いがあり、貴重な時間だった。

日本青年

日韓文化交流の夕べが一番印象に残った。それぞれが用意してきた舞台を見ながら、自然と手拍子や掛け声が起こった時に一体感を感じ、心が温かくなった。

日本青年

文化交流の夕べや文化体験も初めての経験でとても楽しく、韓国の文化を学ぶことができた。

日本青年

様々なプログラムと、韓国語を話せない自分にも積極的に話しかけてくれたり、通訳をしてくれたりする韓国青年のお陰で韓国の文化をもっと知ってみたい、コミュニケーションを取れるよう韓国語を勉強したいと思うきっかけになった。

日本青年





日本語も英語も上手ではないので会話することが大変だったが、日本青年の文化をたくさん学ぶことができて良かった。

韓国青年

日本の友人と一緒に泊まり、日韓文化交流の夕べや日本の伝統遊びを習い、多くの日本の友人を作ることができて本当に良かった。

韓国青年

ルームメイトやチーム、パートナーの組み合わせがすべて違い、多くの友人たちと付き合うことができて良かった。

韓国青年

日本の友人とペアを探したり、一緒に夏祭り体験をしたりすることができて本当に良かった。ディスカッションのときは様々な意見を交わすことができ、三時間が短いと感じた。

韓国青年

日韓青年親善交流事業という名称が一番似合うプログラムだったと思う。ここで知り合った友人たちとずっと連絡を取り合い、関係を発展させていくことが大切だと思う。

韓国青年



愛知県プログラム (7月26日～29日)

7月26日から29日まで、愛知県にて地方プログラムを実施した。

一行は、愛知県到着後、知事公邸にて堀井奈津子愛知県副知事を表敬訪問した。堀井副知事からは愛知県の文化や産業についてのお話があった。

18時半から愛知県主催の歓迎会が開かれ、駐名古屋大韓民国総領事館のウ・ビンウク領事を始め、地元青年や関係者等、多くの方の歓迎を受けた。

翌27日、一行は愛知県立知多翔洋高等学校を訪問し、生徒や地元の方々との交流プログラムを行った。地元の伝統芸能である尾張萬歳の鑑賞や、調理科の生徒による料理の試食体験、和服紹介や部活動見学等、趣向を凝らしたプログラムで、高校生と楽しく交流する機会となっ

た。韓国青年からは、「多様な部活動を見学し、高校生と交流することができて良かった」「日本の学生が単純に学業のためではなく自分の意思で目標を持って努力をしている姿がとても格好良かった」等の感想があった。夜は、地元の大学生を中心とする青年たちと市内を視察しながら交流会を行った。グループに分かれ、それぞれ好みの食事を取りながら楽しく交流した。

7月28日午前、一行は株式会社壺番屋を訪問し、食品の安全について考えるとともに、フードバンクの取り組みについて学ぶ機会となった。午後は、七宝焼アートヴィレッジや佐藤醸造株式会社の訪問を通して、伝統工芸や地元産業に対する理解を深めた。



交流会を終え親しくなった高校生と記念撮影する
(愛知県立知多翔洋高等学校)



生菌の菌数測定器を使い、衛生管理についての理解を深める (株式会社壺番屋)



浴衣の着付けを体験する
(愛知県立知多翔洋高等学校)

韓国招へい 愛知県プログラムを終えて

愛知県青年国際交流機構 受入実行委員長 小牧 夕夏

今回の受入プログラムは、韓国青年たちが愛知県をまた訪れたいと思ってもらえるような構成を心がけた。愛知県特有の伝統文化と製造産業を知ってもらい、地元の人との交流を通じて、愛知県に対する理解を深めてもらいたいと思った。

プログラムを実施するに当っては、時間に余裕を持たせることを意識し、一日に二つ程度のプログラムを実施した。そして、愛知県特有の伝統文化や製造産業を身近に感じてもらうため、韓国でも知られている地元の製造産業を体験プログラムを通して紹介することで、韓国と愛知県が接点を持っていることを身近に感じられる機会を提供した。

良かった点は、プログラムに余裕を持たせたことで、訪問先をゆっくり見学できたことだ。それにより、訪問先の方から詳しい説明を聞くことができたり、韓国青年たちが体験できる時間を多く持てたりしたことで、それぞれの場所の理解を深めるきっかけになった。

また、知多翔洋高校の訪問では、先生や生徒が一丸となって韓国青年を歓迎してくれた。その歓迎の気持ちが

韓国青年たちにも伝わったようで、訪問できたことをとても喜んでいる姿を見ることができた。

韓国青年たちの大部分は愛知県の訪問が初めてだったが、愛知県特有の伝統文化と製造産業を理解できるプログラムに満足したと言っていた青年が多く、私たちが受入れをして嬉しかった。韓国青年たちに愛知県が伝統文化と製造産業の街であることを理解してもらおうという目的を果たせたと思う。また、私たち実行委員も韓国青年たちに同行することで、愛知県は全国でも産業がとても盛んである点を理解し、愛知県の魅力を改めて感じることもできた。

今回初めて愛知県を訪問した青年がまた来たいと言ってくれたことを受けて、製造産業で有名な愛知県を他の人にも伝えて、たくさんの人に愛知県に来てもらいたいと思った。

私は今回の招へい事業で感じた、愛知県が製造産業の街である特徴を体験して、その魅力を伝えることと、受入スタッフが一丸となって訪問者を歓迎することの2点をもとに、今後の受入れを行っていきたい。



韓国人に一番好まれるカレーの辛さを考える
(株式会社吉番屋)



交流会に集まった日本青年たちと記念撮影する(地元青年との交流会)

滋賀県プログラム (7月29日~8月1日)

7月29日、バスで滋賀県に入った一行は、長浜市にある雨森芳洲庵を訪問した。ここは江戸時代に朝鮮との外交に尽力した雨森芳洲の出身地であり、地元住民と交流しながら、雨森芳洲と朝鮮通信使について学び、日本と韓国の交流の歴史を理解する機会となった。

夕方、草津市に移動し、19時からはホストファミリーとの対面式を兼ねた歓迎会が開かれた。歓迎会では滋賀県を始め、ホストファミリーや地元青年等、多くの関係者が参加し、盛況であった。歓迎会終了後、韓国青年はそれぞれホームステイに向かった。

ホームステイは概ね好評で、韓国青年からは、「一般家庭で生活している姿を直接見て、体験しながら楽しい経験をする事ができた」「滋賀県で第二の家族に出会えた」等の感想があった。

7月31日、ホームステイから帰着した一行は、琵琶湖に浮かぶ沖島を訪問した。西福寺にて沖島の概要説明を聞いた後、沿岸で地引網体験を行った。

8月1日、一行は、滋賀県公館にて三日月大造滋賀県知事を表敬した。三日月知事からは滋賀県の特長や日韓の密接な関係性等についてのお話があった。



地元住民と一緒に金魚すくい体験をする(雨森芳洲庵)



お世話になったホストファミリーと一緒に記念撮影する
(ホストファミリーとの交流会)



沖島の歴史と概要について説明を聞く(沖島・西福寺)



三日月大造滋賀県知事と記念撮影する

日本・韓国青年親善交流事業 滋賀プログラムを終えて

滋賀県青年国際交流機構 受入実行委員長 中村 秀輔

今回、日本・韓国青年親善交流事業 滋賀プログラムに実行委員長として関わらせていただき、プログラムを作る側として、また参加者側として様々な気付きを得ることができた。

まずは、運営する側として関わられたことで多くの学びを得たことに関して述べたい。

作り手側として、最優先に考えていたことは、参加青年たちはもちろんのこと、協力してくださる地域の方や施設の方などに有意義な時間を過ごしてもらえるかであった。自分たちの自己満足で終わってしまわないように、何かを考えるときの軸として常に意識をしていた。また、準備を進める中で、訪問施設やローカルの国際交流団体など様々な分野の協力を得て、一つのプログラムが出来上がっていることを実感した。こういったプログラムの背景を知ることができ、「つながり」の大切さを改めて感じた。

そして、実際にプログラムを迎え、青年たちが協力してくださった地域の方々との交流を経て笑顔になり、また「日本・日本人というものを肌で実感しているように思う」と言ってくれていた。その段階で、徐々にプログラムが青年たちに与える影響を実感し始めていたが、真に実感するときはプログラムの終わりであった。プログラムの最後に行ったレセプションでは青年たちと地域の方々の中にも涙を流している方もおられて、短期間であったが涙が自然と流れるくらい充実した時間を過ごしてもらえたと思うと、このプログラムがこれまで実施されている意義を改めて認識した。こういった滋賀プログラムを作り上げることができたのも、実行委員会のメン

バーや地域の方の協力無しではできなかった。本当に心の底からの感謝を述べたい。

次に、参加者側として韓国人青年をホームステイで受け入れたことである。私の家では、韓国人の青年を一人ホームステイとして受け入れた。二泊三日という短い時間ではあったが、彼との交流がもたらした家族への影響は多大なものであった。例えば、韓国に対する印象である。私の両親は今まで韓国人の方と話したりする機会は一度もなく、韓国人という言葉に触れるのは主にメディアからであった。そのメディアが報じる内容は、日本人と韓国人はお互いを忌み嫌い合っているというものが多くあった。しかし今回、韓国人青年を家族の一員として受け入れ、話すことで、彼らの韓国人に対する印象は大きく変わった。「国籍は違えど、人は人」、メディアでは日本と韓国がお互いを嫌い合っているという事が度々報じられているが、実際に肌で他文化を感じることで、日本人も韓国人も人間であり、お互いのことを話し理解できるのではないだろうかと感じていた。メディアからの情報を鵜呑みにするのではなく、「我が身で感じる大切さ」を改めて認識した。

上記で述べたように運営者側としてだけでなく、私自身が参加者側としてもプログラムに関わることで他の参加者の生の声などを肌身で感じることもできた。

また、このような国際交流の機会を設けることは、関わった人たちへの新たな気付きになることは間違いないであろう。そのため今後ともこのような機会があれば、自ら志願し関わっていききたい。



閉会の挨拶をする筆者（歓迎会）

滋賀県ホストファミリー 中嶋 祐希

今回、このプログラムにホストファミリーとして参加させていただくことが決まってから、実際にホームステイの学生が来る日を迎えるまでの間、正直とても不安でした。私が韓国に留学していたこともあり、韓国の人と接することは多かったものの、実際に海外の学生を我が家に迎えることは初めてでした。食事はどうすればいいのか、どこへ連れて行けば喜んでもらえるのか、習慣やマナーの違いで嫌な思いをさせてしまわないか、ずっと悩んでいました。

歓迎パーティーの日、初めて顔を合わせて、お互い少し照れくさがりながら挨拶をしました。私や妹と歳が近いこともあり、すぐに打ち解けられ、ずっと不安だった気持ちもなくなりました。その日は帰りにスーパーに寄って、お菓子や飲み物を買いました。私たちが日頃目になっているもの一つ一つに興味津々で、こちらも楽しくなりました。

次の日、黒壁スクエアへ行って、ガラス細工の体験をしました。様々な工芸品がありましたが、二人は風鈴を作りたいと言いました。色々な話をしながら、みんなで風鈴を作りました。二人とも日本の伝統工芸に興味を持ってきて、あれは何、これはどうやって使うのと色々な質問をされてうれしい反面、日本についてまだまだ自分自身知らないことが多く、恥ずかしかったです。

最終日、お別れパーティーの時は本当の家族との別れのように、とても寂しかったです。二人も泣きながら手紙をくれました。言葉や文化が違ってても、お互いに歩み寄ろうとすれば、気持ちは通じるものなのだと実感しました。二日間という大変短い期間でしたが、貴重な体験ができました。また機会があれば、是非もう一度プログラムに参加したいです。



韓国青年と一緒にガラス細工の体験をする



三日間一緒に過ごした韓国青年と記念撮影する
(ホストファミリーとの交流会)

東京プログラム（8月1日～3日）

8月2日午前、評価会を行い、「本事業に参加して学んだこと」「今後この経験をどのようにいかしていきたいか」「プログラムの改善点等」の3点についてグループディスカッションを行った。韓国青年各々の事業の成果を振り返るとともに、今後の活動に向けての展望を話し合った。

11時30分からは、和田昭夫内閣府青年国際交流担当室長主催の歓送会が開催された。歓送会には、青少年団体関係者、青年国際交流事業既参加者が多数参加し、盛況であった。

午後の自由視察には、日本滞在中に出会った日本青年が多数駆けつけ、共に交流しながら視察をする機会となった。日韓両国の青年は日本語・韓国語・英語をおりませながらさらに交流を深めることができた。

翌3日、一行は、成田国際空港へ向かい、13時50分発OZ103便で帰国の途につき、15日間の日程を無事終了した。



プログラム評価を行うとともに、今後の展望について意見交換する（評価会）



挨拶をする和田昭夫内閣府青年国際交流担当室長（歓送会）



歓送会の出席者と共に記念撮影する（歓送会）



空港に見送りに来た日本参加青年と別れを惜しむ